

文化財を訪ねて——見てある記——

縁起や伝承にみる神仏の出現

市内には多くの杜寺があり、人々に大切に信仰されている。これらの杜寺のなかには、御神体や御本尊にまつわる縁起や伝承が伝わっている。

民俗学者の宮田登は神や仏の出現方法について、天空飛来、漂着神、土中出現と三つの方法を紹介している。天空飛来とは神仏が天空からやってくるもの、漂着神とは流れ着くものである。今回、市内の神仏をこれらの視点で見てみたい。
加納天神縁起にみる——天空飛来型——

この縁起には、加納村の天神社は、宝徳二年正月二十四日の夜、杜が震動して森の中に光があった。当時の別当性円上人は、めでたいことの前兆として現れた不思議な現象を見たので、翌朝早くお参りすると、「コウノトリ」が神像を杜に安置して、あやしい音を立てて空に舞い、いづれか去った。と記されている（注1）。

神像が現れたことを、杜の震動や森の中の光などの超自然現象とコウノトリが舞い上がっていく様子で示されている。この神像はコウノトリにより天空からも

たらされたものである。



加納氷川天満神社

浅草寺の観音と泉福寺引船観音

——漂着神型——

浅草寺の本尊は、もとは川田谷の地にまつられていた「多んぶたごん」の正観音であったという。この正観音は承平年中、荒川の大洪水によって本堂と共に流失して行方がわからなくなったが、そのころ宮戸川で網をひいていた友成、浜成、竹成の三人の漁夫の網にかかって、しきりに御光をさした。その靈威にうたれた兄弟は、堂を建てて入仏させた。これが浅草寺の観世音であるという。現在の引船観音は、川越城主松平綱が新造して、さきの観音の旧地に祀った

ものであるが、この時、新造の観音は一夜のうちに江戸からこの川上の地まで自然に着船したという。よって、この新造の観音を引船観音と称している（注2）。
浅草寺の伝承は、浅草寺縁起にも「推古天皇三十六年三月一日の早朝、檜前浜成、竹成の兄弟が江戸浦（隅田川）に漁撈中、一鉢の観音様のご尊像を得得した」とある。仏像が水中から引き上げられ、祀られる話は各地に伝わるが、泉福寺の話は流れ出た所の話として語られている。

また、引船観音は、江戸から荒川を川上の川田谷まで遡って来たものである。このことは、通常ではあり得ないことなので観音様の強い意志を超自然的なこととして記されている。



川田谷泉福寺

注1「光照寺」加藤貴一 平成3年
注2「埼玉県伝説集成 中・歴史編」